



TITLE:

# 躍動する精神(續): 王國維の史學について

AUTHOR(S):

井波, 陵一

---

CITATION:

井波, 陵一. 躍動する精神(續): 王國維の史學について. 中國文學報 1991, 43: 86-125

ISSUE DATE:

1991-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177482>

RIGHT:

## 躍動する精神（續）

——王國維の史學について——

井 波 陵 一

滋賀大學

はじめに

王國維（二八七七—一九二七）の學問は、辛亥革命をはさんで前後二つの時期に區分して考えられることが多い。哲學や文學を對象とした前期については、時代の先端を駆け抜けようとした情熱的態度への評價と、ショウペンハウアーを鄙視する立場がそのまま彼に適用されることから来る論難とが錯綜する。歴史を對象とした後期については、出土資料を驅使した劃期的成果への稱賛と、革命以後の出處進退を時代遅れとみなす批判とが同じく錯綜する。だが少なくとも方法論に關して言えば、彼のいわゆる「二重證據法」はすでに哲學研究の段階において高いレベルで用いら

れており、したがって對象の變化によって時期區分することとは便宜的な措置に過ぎないと考えた方がよい。ただし「二重證據法」はあくまで個別の事例を扱う際の態度であり、さらに一步踏み込んで、一貫した方法論を支える問題意識、すなわち彼にとってある對象が「二重證據法」によって分析されねばならない必然性を考察する必要がある。個別の成果はどこへ收斂されていくのだろうか。

哲學や文學を取り上げた背景には、自分が存在する「いま—ここ」をどのように解釋すべきかという一種の危機意識が漲っている。實證主義的と言われる『宋元戲曲考』においてすら、「紅樓夢評論」や『人間詞話』で打ち出された流れに沿って文學の本質が求められている。哲學や文學の研究においては、普遍性を志向することによって、同時に強烈な現状認識をもち得たと言つてよい。

これに對して、個々の事實の有無に深くこだわる歴史研究にあっては、「いま—ここ」とは何のゆかりもない發見と解釋が積み上げられていくように見える。發見された事實をなんらかの「理論的指導」に基づいて「いま—ここ」

に反映したがる人々は、それゆえ「木を見て山を見ず」といった批判を王國維に浴びせすにはいられない。<sup>(1)</sup>だが古く殷周時代に遡り、遠く西域地方に歩み出た彼の數多くの論考は、中國の歴史や文化が恐るべき深さと廣がりを持つことを丹念に確認している。ここには中國を根源的にとらえようとする態度以外あり得ない。

『ヴァルター・ベンヤミン著作集』第十一卷『都市の肖像』（晶文社 一九七五年）の解説において、川村二郎氏は次のように述べる。

遠方への旅が、エキゾチズムの陶醉に終るのではなく、自己自身を異った環境の中で改めて確認する試みだとすれば、過去への旅は、追想の底から現在の意味を探り出す試みだということになる。いずれの場合にせよ、別の世界の中に本來のものを見いだそうとする試みであり、考えようによっては、まわりくどい迂回の道筋のようでもあるが、しかし迂路を通じてはじめて到達される本來のものとは、手もとにあつたやすく捉え得るそれに比べて、はるかに深く微妙な意味を

躍動する精神（續）（井波）

そなえてくるかもしれないのである。

文獻と出土資料をガイドとして、王國維の旅はどのよう  
に續けられたのだろうか。

## 第一章

王國維が經史小學へ方向を轉じたことについて、羅振玉は「海甯王忠愍公傳」の中で次のように述べる。

孔子の學は古を信じることにかかっている。ところが今の人は今を信じて古を疑う。國朝の學者は古文尙書を疑い、尙書孔注を疑い、家語を疑う。疑う所はもとよりの射ていないわけではない。だが大名の崔氏が考信錄を著すに及んでは、多く必ずしも疑わしくない所を疑っている。最近になると、本來の姿を歪めることがひどくなり、諸經はみな偽造されたものだと言うまでになった。ヨーロッパの學問に至っては、その議論の立て方は多く周秦の諸子に似ており、ニーチェ諸家の學說のごときは、仁義を賤しみ、謙遜を輕んじ、節制を非難する。新文化を作り出して舊文化に代えよ

うとすれば、弊害がいよいよ多くなる。現在世論はますます分化しているが、三千年の教えや恵みは一本の糸のように絶えることなく續いており、歪曲を矯正しない限り正道に立ち返ることはできない。今日の世界に生まれては、男子たるもの何事もなし難い。もしこの異常な事態を救おうとするならば、正道に立ち返って古を信じる以外に手だては無い。公はちやうど壯年に達し、予もまた老衰までには間があれば、先人の教えを守り後輩を待ちながら、一緒に勉め勵みたいと思う。公はこれを聞くと恐れ謹んで反省し、以前に學んだことは醇正でないという理由で、行囊の靜安文集百餘冊を取ると、悉く破り捨てて燃やしてしまい、北面して弟子と稱したいと願った。予は東原(戴震)の茂堂(段玉裁)に對する關係を引き合いに出して辭退した。その遷善徙義の勇敢さはこのようだった。<sup>(2)</sup>

だがこの話にはどこか出来過ぎた所が感じられ、額面通り受け取るわけにはいかないようだ。たとえば、吳文祺はこれを眞っ向から否定している。

私はこれは羅振玉がでっち上げたたわごとだと思ふ。なぜなら該遺老は一九二三年に『觀堂集林』のために序文を書いた時、『靜安文集』を燃やしたことは一言だって觸れていないからであり、當時王氏はまだ健在だったから、彼としても本人の前でデマを飛ばすのは具合が悪かったのだろう。王氏の遺書を編纂する時になって、王氏はもうこの世におらず、死人に口無しということ、彼はでたらめを吹聴することができたのだ。これが信用できない第一点である。『靜安文集』はかつて上海商務印書館が代理販賣しており、一九二〇、一九二一年の『圖書匯報』にも、まだはっきりと『靜安文集』の名が留められている。王氏は行囊中の『靜安文集』については以前に燃やししながら、商務が代理販賣する『靜安文集』の方は外部に流布するに任せた、などという道理が一體どこで通用するだろうか？これが信用できない第二点である。ニーチェやショウペンハウアーの學説が人の注意を引いたり、小説や戯曲が文學家に重視されるようになったのは、ど

ちらも「五四」以後のことであり、羅氏が王氏に小學訓詁を專攻するように勧めたのは辛亥の年である。辛亥革命では政體が形式を換えただけであり、上部構造の文化に至っては、何ら根本的に動搖していない。當時の革命黨人、たとえば章炳麟や劉師培などは、いずれも小學を詳しく研究したことで世間に名を馳せていた。そのうえ章氏は古文經を篤信し、疑古派には屬していない。當時、羅氏が清室の遺老として、心を痛めていたのは清室の轉覆であつて、舊文化の滅亡ではないはずだ！王氏に對する羅氏の忠告が、「五四」以後に發せられたのなら、まだつじつまも合うが、いわゆる「辛亥國變」の時に發せられたのであれば、ピン外れは免れない。おおかた該遺老は「五四」以後の西洋文化の輸入、白話文の盛行に鑑み、歴古相傳の孔孟の道が斷絶してしまふと感じたのだらう。そして『靜安文集』が文學や哲學を論じたもので、すこぶる新文化運動を助長する作用があるために、彼はそれが世間に流布するのを願わず、そこではじめて王氏が自

躍動する精神（續）（井波）

分で燒き捨てたという話を故意に捏造して、世人を騙したのである。惜しむらくは御自分の立説の破綻に氣がつかれなかつた。これが信用できない第三點である。<sup>(3)</sup>まことに手厳しいが、ただ羅振玉の話から、少なくとも王國維の方向轉換がきわめて重大な決意をはらんでいたことは窺い知れよう。狩野直喜の追憶によれば次の通りである。

それから彼の清朝の大革命が勃發するや、王靜安君は家族を引き具して羅叔韞君と共に我が京都に來られ五六個年間滯留せられることとなり、此の間、私との間には始終往來が繼續した。此の京都へ來られたる頃よりは少し同君の學問の傾向が變つて居つた様に觀察せられる。と謂ふ譯は今一度新しく支那の經學を研究して新しき見解を立てむと志せる如くであつた。支那の經學の研究のし直しを爲さむとするのであつたと思ふ。例へば何か話の間に、私が西洋の哲學云々を謂ふと、王君は何時でも苦笑して、私は西洋の哲學は解し得ませぬと謂つて避けて居られた。その後元の雜劇の研究

より擴めて彼の『宋元戲曲史』の書を著はされたが、此の著は同君としては全く餘技の著述であつた。嘗て謂はれるやう、雜劇の研究は彼の『宋元戲曲史』の書を以て終末とし、これから以上は研究は致しませぬ、と。然らば當時の同君の學問的研究の本領は如何なる方面であつたかと謂へば、當時同君は『十三經註疏』を精密に読み直しをして居られたらしく又『二十四史』のすべてでもあるまいが、少くとも『前後漢書』『三國志』等をばこれ亦精密に読み直して居つたらしく、京都に寓居して閑日月が多く、自然精讀に耽り得たのである。書籍をば何等の直接目的なくして讀破することは有意義なることであるが、餘程の閑日月を得るに非ずんば不可能のことである。想ふにそれ或は天が幸を垂れて同君にこの好運を與へたものかも知れぬ<sup>(4)</sup>。「精密に讀み直し」て「新しき見解を立てむ」とするといふのは、根本に立ち返つて事物の眞の姿を發見することにはかならない。かつて王國維は哲學や文學の方面においてこうした作業を繰り返し、「能動」あるいは「自然」と

いった言葉に強い意味をこめながら、先人の論理や文章を自分のものとすることによって、「いま—ここ」を主體的にとらえようとした。そして『靜安文集』と『人間詞話』あるいは『人間詞話』とその『刪稿』を比較すれば分かるように、彼は普遍的な枠組みを一氣に構築せんとする當初の姿勢を改め、それぞれの表現が到達した「眞理」をその都度確認することの連續の中に、人間の生の充實を見ようとしたのである。この態度は經史の研究においても貫かれていと言つてよい。なぜなら發見された事實は、言わば未明の世界を照らし出す燈であり、それが數多く重なり合つて輝きを増したり、思いもかけぬ場所にまで光の海が廣がつたりすることによって、我々自身の存在の根據が時間的にも空間的にも豊かになるからである。王國維は靜かにスタートを切つた。繆荃孫に寄せた書簡に言う。

半月後、吉田町神樂岡八番地に轉居します。吉田山を背にし、如意嶽に面し、羅（振玉）、董（康）二公の新居にととても近く、靜かで景色の良い所なのですが、ただ市街からはやや隔たつております。轉居した後は、毎

日注疏を一巻ずつ読み、三禮から始めて、他の經書に進むこととし、そのさい中斷しないように心がけておりますが、長續きするかどうか分かりません。(一九一三年舊曆二月十九日)<sup>(5)</sup>

## 第二章

趙萬里が作成した「王靜安先生年譜」(以下、「年譜」と稱す)によれば、一九一三年、王國維は三禮と同時に段玉裁の『說文解字注』を通讀している。正攻法と言うべきだろう。

### 癸丑三十七歲

この歳三禮に圈點を施して、一度精讀し、ならびに時に疏記を作る。二月九日より始め、三月十八日に至って、『周禮注疏』を読み終わる。先生は自ら注疏本の後に跋を記して、「この時は疏に重點を置き、經注にはかえって注意を向けなかった」と言う。四月二十一日より始め、六月九日に至って、『儀禮注疏』を読み終わる。一日に一巻を讀破し、そのうち

躍動する精神(續)(井波)

二日は二巻を讀破して、幸い中斷しなかった。また八月十一日より始め、十月十二日に至って、『禮記注疏』を読み終わる。ならびにその後跋を記して、「沖遠(孔穎達)の疏は、大典の制についてなお魏晉六朝の古説を存する以外、取るべき點は殊に少なく、その經旨を敷衍した箇所は、科舉受験參考書に類して、人に嫌氣を起こさせ、賈氏(公彦)の二禮の疏に遠く及ばない。もしその蕪穢を去り、その菁英を残すならば、また經義の得失の森である」と言う。

先生は三禮を讀んだ時、また段茂堂の『說文解字注』を一通り圈點を施しながら讀んだ。二月二十七日より始め、三月十二日に至って第三篇を終わる。當時「明堂寢廟マヤ通考」を書いていたので、四十日餘り中斷した。四月二十六日より始め、五月下旬に至って、また第七卷から第十五卷までを終わる。七卷以下は、ざっと一度目を通しただけで、もう圈點校正しなかったのは、おそらく當時また他の仕事に従事していたためだろう。<sup>(6)</sup>

三禮精讀の成果としては、『考工記』を読み終えるところに書き上げた「明堂廟寢通考」と、衣服制度によって幣帛の長短廣狹を考え、また歷代の布帛の丈尺價值を考えた「釋幣」(秋に完成)がある。さらに羅振玉から封泥の拓本の整理を要請された王國維は、古代史研究における彼の基本的態度を確認するかのよう、同年舊曆八月に成した「齊魯封泥集存序」(『觀堂集林』卷十八所收)の冒頭で出土資料の重要性を強調している。

宋人が始めて金石の學をおさめるようになると、歐(陽脩)、趙(明誠)、黃(伯思)、洪(适)は各々古代の遺文に基づいて經を證し史を考え、みな新發見があつた。だが道筋はつけられたものの、學問の一支流としての廣がりにはまだ缺けていた。最近二百年の間に始めて輝かしい發展を遂げ、そこで三古の遺物が時勢の推移に應じて現れた。丘陵や洞窟から出た金石は、すでに以前に比べて數十倍の數に達している。このほか、涇陰の甲骨、燕齊の陶器、西域の簡牘、巴蜀齊魯の封泥といったものが、みな最近數十年間に出土しており、

金石なる名稱はこれらを併せ含めるには十分とは言えない。この數者は、數量の多さ、年代の古さから見れば、金石と同じであり、經を考え史を證するに足るといふ點でも、また金石と同じであつて、どれも古人が見るに至らなかつたものである。<sup>(7)</sup>

新しい資料の整理によって從來の資料の不備を發見することは、言うまでもなく重要な基礎作業である。「齊魯封泥集存序」においても、漢代の官制や地理について合計六項目の指摘がある。たとえば、

地理を考證するに至つては、とりわけ有益な點が多い。建置の方面から言えば、この編の中には郡守の封泥として臨菑、濟北の二郡が、太守の封泥として河間、即墨の二郡が、都尉の封泥として城陽一郡が有り、いずれも漢志には無いものである。<sup>(8)</sup>

こうした「こちらには有るが、あちらには無い」といった單純な比較から進んで、王國維は「臨菑」を取り上げる。ただ臨菑守の印花は、齊國がすでに建てられた後には、内史と稱すべきである。國が除かれた後では、また齊



郡太守と稱すべきである。この印は臨菑守と言っているから、必ずや高祖の初期、悼惠王がまだ封ぜられていない時期に當たる。しかも臨菑は秦の郡名であるに相違ない。始皇帝は六國を滅ぼした後、設置した諸郡について、その國名を用いていない。東郡は衛郡と言わず、潁川は韓郡と言わず、邯鄲は趙郡と言わない。どうして臨菑だけ齊郡と稱するだろうか。とすれば、漢の初めの郡は必ず秦の郡名を襲っているわけだから、班固が齊郡を秦の郡とみなして、それを故の秦の臨菑郡と言わなかったのは、間違いである。<sup>(9)</sup>

ここでは班固の記述自體が問題にされているわけだが、これに類するいくつかの指摘を積み重ねてゆけば、當然次のような結論が出ることになる。

およそその數點は、みな一代の故實を存し、千載の覆蔽を發き、聚訟の疑問を決し、沿襲の誤解を正すに足るもので、史學において裨益補充することが少なくない。<sup>(10)</sup>

これによって封泥の價值は十分に立證されたと見えよう。

躍動する精神（續）（井波）

だが王國維にとつて、この作業は『漢書地理志』の單なるチェックに終わらなかつた。一九一三年舊曆十月頃、繆荃孫に寄せた書簡に、

近ごろ韞公（羅振玉）のために『封泥集存』を編集し、そこで兩漢の地理を考えることになって、始めて『漢志』の疎漏を知り、「秦郡考」「漢郡考」の二文を仕上げました。裴駟より以後、國朝の全（祖望）、錢（大昕）、姚（鼐）諸家に至る爭訟は、ここに至つてすっかり解決したと考えております。<sup>(11)</sup>

と記す通り、彼は秦漢の郡國の數について突っ込んだ考證を行っている。『觀堂集林』卷十二に收められた「漢郡考」において、

誰もが尋ね求めて漢志の二十六という數に足し合せている。その是非はひとまず置いて論じないが、要するにみな班氏の説を絶對的根據とみなしている。それはこの數人だけに止まらない。從來漢書を讀む者は、そのほとんどが班氏の説を絶對的根據とみなさずにはおかないのである。私の見る所、上に挙げた二十六郡

國のうち、本當に高祖が置いたものは三分の一にも満たないのに、この事實を察した人はいなかった。これはまったく奇妙なことである。<sup>12</sup>

あるいは

漢志のいわゆる高祖が二十六郡國を増し、文帝と景帝が各々六であるというのに至っては、史記や漢書の紀傳を参照してみると、一つとして合致しない。それなのに從來これを整理する者がいなかった。このことを私は非常に不思議に思っている。<sup>13</sup>

という大膽な見解を提出するに至ったのは、封泥を扱うことによって『漢書地理志』の記述をより相對化し得る感覺を身につけたからだろう。そうした態度が、

史書を作る者はただ後世の版籍に基づいて、あらまし沿革を記すに過ぎない。だからただ漢志の文章だけに基づいて漢初の諸侯の疆域を求めても、その大小廣狹は、實際と同日に論じるわけにはいかない。<sup>14</sup>

といった冷靜な判斷を生み出すと言えようか。ただここで見落とせないのは、「秦郡考」や「漢郡考」が、封泥と『漢

書地理志』を直接突き合わせることによってではなく、あくまで『史記』なり『漢書』なりを改めて讀み込むことで成立したという點である。出土資料の劃期的な價值を決定づけるのみならず、從來の文獻の潜在的可能性を引き出すこともまた「二重證據法」の重要な特色だということを忘れてはならない。(たしかに王國維自身、「古史新證」において「二重證據法」という言葉を使っているわけだが、だからと言ってそれを史學の分野に限定して取り扱ったならば、おそらく彼の存在意義を矮小化してしまうことになるだろう。)

### 第三章

一九一四年、『流沙墜簡』が出版された。「年譜」には次のように記す。

甲寅三十八歲

正月、「屯戍叢殘考釋」の草稿が出来上がる。羅先生が撰した考釋を合わせ、順番に校録し、四月になって寫し終わる。羅先生は先生の手寫本に基づいて石印に付し、『流沙墜簡』と名づけた。先生はまた

序文を書いて木簡出土の地を考察し、數萬字の長きに及んだが、それは實に西域の古地理を研究する近代最初の文章となつた。<sup>(4)</sup>

また繆荃孫に寄せた王國維の書簡においても、『流沙墜簡』の出版が學界に及ぼす影響の大きさが力説されている。

年の始めに蘊公（羅振玉）と一緒に『流沙墜簡』を考釋し、ならびに自ら寫定を行い、ほぼ三四箇月かけて成し遂げました。これは漢代の史事に極めて大きな關係を持つており、現存する數十通の漢碑ですらこれとは比べ物になりません。日本人はそのことが分からず、中に古書が少ない點を残念がるだけで、それが史籍に記録していない事を記録し、古書以上に貴重なのだということには思い及ばないのです。考釋は草々に原稿を作ったとは言え、地理の方面で裨益する點が最も多く、それ以外の制度名物に關するものにもすこぶる新發見が有りますから、竹汀先生（錢大昕）ほどの人物に執筆してもらつたとしても、多分またこの程度に過ぎないと考えております。（一九一四年舊曆閏五月二十五

躍動する精神（續）（井波）

日<sup>(5)</sup>

さらに魯迅の『熱風』（一九二二年）に收められた文章も、『流沙墜簡』が學界にもたらした衝擊と王國維の水準の高さを語るものとして、今日では必ずと言っていいほど引用される。

中國には『流沙墜簡』という書があり、出版されてもう十年にはなる。國學を談ずというなら、それこそが國學を研究した書と認められるだろう。冒頭に一篇の長い序文があり、王國維先生が書いたものだが、國學を談ずというなら、彼こそが國學を研究した人物と認められるだろう。（わからない音譯<sup>(6)</sup>）

王國維が著した『流沙墜簡序』では、『史記大宛列傳』や『漢書地理志』『括地志』などを利用して漢代の玉門關の位置が、また『水經注』や『漢書西域傳』などを利用して樓蘭の故城の位置が考察されている。その仕事に對する評價は言うまでもなく高い。

當然、新しい漢簡の絶え間ない發見、漢史研究の全面的展開に隨つて、王國維の幾つかの間違った考釋や論

證に氣がつき、それによってこれを匡正し補充する所もあるだろう；だが、王國維先生の創業の功は決して消え去ることはない。<sup>108</sup>

利用されている文獻の中で注目すべきは『水經注』だろう。『觀堂集林』卷十二には「宋刊水經注殘本跋」から「聚珍本戴校水經注」まで、『水經注』に關する跋文があわせて六篇收められているが、陳橋驛の調査によれば、『觀堂別集』卷三に收められたものも含めて、現在確認できるのは八種類の版本に對する九篇だといふ。<sup>109</sup>これは決して少ない數ではない。古代の地名を考えるに際して『水經注』を参照するのは當然の話だが、テキストに問題の多い『水經注』を正確に利用するためには十分な準備が必要である。出土資料を読み解くことが從來の文獻の一層の整理を促す——王國維にとつてはごく普通の手續きに過ぎないのだから。

彼の校勘工作の成果は、一九八四年、上海人民出版社から『水經注校』（袁英光・劉寅生整理標點）として出版されている。その前言によれば、

『水經注』は古代の歴史地理を研究する重要な資料であるため、王國維は非常にこの著作を重視し、彼が中國古史の研究と考證に従事する時には、さっそくその中に載せられた資料を應用した。彼の多くの著作は、どれも『水經注』の中の關連資料をつかみ取ることと切り離せない。彼が『水經注』を校勘したのも比較的早い。一九一六年舊曆三月、彼は羅振玉に寄せた書簡の中でこの事を話題にし、そして四月には、沈曾植（乙庵）校吳縣曹氏舊藏殘宋本『水經注』卷三十九の半ば及び四十を手臨したが、沈が宋本を明嘉靖年間黃省曾刊本上に校したのに對し、王國維の方は趙一清の『水經注釋』に移録している。一九二二年から一九二五年の間に、彼はまた『水經注』の宋刊殘本、大典本、明抄本等々を借りて、また次々に校勘を行った。<sup>110</sup>

彼の粘り強さは、一般の藏書家に見られる「校勘のための校勘」とは明らかに質を異にする。『水經注』が持つ學問上の意義を、今まさに進みつつある劃期的な仕事との關連の中で再確認し、そこに廣がる空間を、たとえば『流沙

『陞簡』と共有させることで、中國という歴史世界を劇的に再構成するのである。とすれば、

ゆえに王氏の作業は、校勘作業であるのみならず、同時にまた鄺學史を整理する作業でもあった。王氏以前の鄺注の校勘者は、この方面では實に取り立てて言うほどのことはなく、だから王氏のこの方面での成果はとりわけ重視に値する。<sup>20)</sup>

というような評價は、やや的小さいのではないだろうか。王國維が扱ったその他の敦煌文書について詳しく取り上げることはできないが、たとえば、『觀堂集林』卷十七に收められた「尼雅城北古城所出晉簡跋」(一九一四年)では、「親晋某王」という呼稱が「漢某國王」に由來することを、『漢書西域傳』や『魏志倭人傳』(親魏倭王)などに例を求めつつ考察し、政治的關係の變化を押さえながら、

その王號が親魏親晋の文字を冠して直接に魏晋と言わ  
ないのは、純粹の臣下でないことを示すためである。<sup>21)</sup>

と結論づけている。また出土した地點が漢代の精絕國の疆域に當たることから、その國の沿革についても考えを述べ

躍動する精神(續)(井波)

ている。この跋の最後の一文は彼の一般の見解としても通用するだろう。

右の二簡の存する所は三十字に及ばないが、史事を裨益するに足るものはこのようである。だがこの二簡が一つの書であることを知らなければ、啓發するところ  
はあり得ない。<sup>22)</sup>

さらに『觀堂集林』卷二十一に收められた「唐寫本春秋後語背記跋」(一九一三年)では、背記に残された「望江南」及び「菩薩蠻」の流行に李德裕と宣宗が關係していることから、

この背記は咸通年間に書かれ、太和末年からは二十年  
餘り、大中からだと數年を越えないのに、すでにこの  
二つの調名が有る。あて字や聲律の誤りはここかしこ  
に見られるものの、邊境の沙州が、大中年間に内屬し  
て以後、またすこぶる中原の最新文化に接したことが  
分かる。<sup>24)</sup>

と述べ、より大きな視野から資料を読み解いている。なおこの方面における王國維の業績については、袁英光の「王

國維與敦煌學」に詳しい。

## 第四章

王國維が『殷虛書契考釋』のために二篇の序文を書いたのは、甲寅冬十二月（一九一五年初め）である。いずれも『觀堂集林』卷二十三に收められているが、そのうちの「後序」には次のように言う。

私は商遺先生（羅振玉）のために殷虛考釋を書し、終わった後で、ここ三百年における小學の一つの總括であると感じ嘆した。そもそも先生は書契文字において、その蒐集流通の方面でも、思うに考釋の方面に劣らない成果を収めている。考釋という點で言えば、その經史諸學における功績は、小學のそれに譲るまい。小學という點で言えば、その篆文における功績は、また古文のそれに譲るまい。だが考釋の根底は文字に在るし、書契文字は古文であるという理由から、とりあえず古文について述べてみたい。わが朝の學術の中で前代よりも桁違いに素晴らしいものは、小學である。順治康

熙年間、崑山の顧亭林先生が、始めて說文音韻の學を修めた。說文の學は、金壇の段氏（玉裁）に至ってその深奥を究めた。古韻の學は、江（永）、戴（震）諸氏を經、曲阜の孔氏（廣森）、高郵の王氏（念孫、引之）に至ってその精微を盡くし、王氏父子と棲霞の郝氏（懿行）とが、またこれを運用した。こうして詁訓の學が大いに明らかになったのである。もし世の中にいわゆる古文というものが無かったならば、小學はここにその頂點を極めたと言ってもよかつただろう。古文の學は、乾隆嘉慶年間に萌芽したものの、當時大學者と言われた人々はすでに亡くなったり、高齢であつたりしたために、この仕事に従事するには至らなかつた。儀徵（阮元）の一書（積古齋鐘鼎款識）も、またただ宋人を祖述して、いささか評價を加えただけである。そして字例に通じず、傳統の學問に習熟していない淺學無學の輩が、古文に託された内容が高遠で、その意味を知る人が稀であることから、解明の糸口が見つからないのを勿怪の幸いとし、幽靈や妖怪は難無く描くことができると考

えて、そこでその勝手な憶測をほしいままにし、何ら憚る所も無い有様となり、莊葆琛（述祖）、龔定庵（自珍）、陳頌南（慶鏞）の徒に至ると、古文の災厄は絶頂に達した。近ごろでは瑞安の孫氏（詒讓）がすこぶる法則を守り、吳縣の吳氏（大澂）が獨り束縛から解放されていたのだが、説文における段君、聲音訓詁における戴段、王、郝の諸君ほどには、整然と筋道を立て、奥義を開示することはなかった。段君は文字に深く通じていながら、多く古文を見るに及ばなかったがゆえに、吳君の才識は段君に劣らないのに、官職に累わされ、段君のようにゆったりと長生きしてその學問を仕上げる事ができなかったがゆえに、ついにわが朝の古文の學を詁訓説文古韻の三者と同等の地位に引き上げるまでには至らなかつたことを、私はいつも恨めしく思う。本當に残念なことだ。先生は早くから文字故訓を治め、繼いで群書を博覽し、多く古器を見知つた。その才と識はもとより段、吳二君と肩を並べており、従容として學問に勤しみ、古典を飽きるほどに讀んだ點

躍動する精神（續）（井波）

は、吳君がその志は有つても果たせなかつたことである。しかもこの書契文字は、また段、吳二君の見るに及ばなかつたものである。物が人を需め、人もまた物を需める。書契の出現が、ちょうど先生の時代に當つたことから、天がわが朝の古文の學を盛んにして、詁訓説文古韻に匹敵させようとしたことが分かるではないか。

「物が人を需め、人もまた物を需める」という言葉は、まさしく「能動」の現れにほかならない。

さて『殷虛書契考釋』が殷代の歴史を解き明かすための直接の手掛かりになることは言うまでもないが、王國維が力説するように、それはまた小學という重要な學問分野に對しても大きな影響を與えるものであつた。まずこの方面における彼の成果を追うことにしたい。王國維にとって小學がどのような意味を持ったかについて、吳其昌の「王觀堂先生學術」は次のように概括する。

先生が古史を治めるに當たつて、小學を出發の根據としたことは、すでに略述した通りである。だが小學の

中において、またその根據や出發點がある。清の最盛期における小學の専門家の場合、段若膺（玉裁）一派ならば、『説文』を根據とし、それで以て群經を貫く。

郝蘭皋（懿行）一派ならば、『爾雅』を根據とし、名物から小學を逆推する。王石臞（念孫）一派だと、まず群經から着手して、『説文』に歸着する。近世の章太炎（炳麟）一派だと、音韻から小學の本源を探り當てようとする。そして先生の一派は、まず契、古、籀等の文字に手をつけて、『説文』に歸着しようとする。その順序はちょうど段君と反對になり、王君と合致する。だから先生の學問は、程（瑤田）、吳（大澂）、孫（詒讓）諸君のそれとよく似ているけれども、小學において先生が王君の學説をつねに強く支持踏襲したことは、『觀堂集林』を細讀すれば分かる。王君の治學の目的は通經に在ったので、群經から出發しており、先生の目的は考史に在ったので、古文字學から出發しているものの、『説文』を證合の鍵とした點では同じである。だから先生の學問は、目的は古史に在るが、根據は小

學に在るといふことになる。小學においては、鍵は『説文』に在るが、根據は古文字學に在るといふことになる。この數言でまとめられよう。今試みに一例を擧げてみる。先生が龜甲文字から出發して、吉金文字を證合し、さらに『説文』をかねめとして、商代の帝嚳を考えたことがそれである<sup>四</sup>。

甲骨、金文、『説文』の三方面からの考察を重ね合わせて、字義の安定した解釋を導く典型的な例としては、『釋史』〔「釋由」〕〔『觀堂集林』卷六所收〕などがある。こうした方法を積極的に用いる背後には、文字は本來歴史的な產物なのだから、時代の流れに即して合理的に分析すべきだという確信がなければならない。そのことを端的に述べたものとして、『觀堂集林』卷六に收められた「毛公鼎考釋序」（一九一六年）が擧げられよう。

文に古今は無く、文意が通らず用語が適切でないものも無い。今日通行している文字であれば、誰もがそれを読んで理解することができる。詩書や彝器に見えるものもまた古代に通行した文字である。それが今日讀



みにくいのは、今の人が現代を知るほどには古代を深く知り得ないためである。もしこれを史實や制度文物に照らして時代の情況を知り、詩書に基づいて文章の範例を求め、古音に考えて意味の假借を通じ、彝器と比較して字形の變化を調べ、此より彼に行き、甲から乙を推せば、形が解けないもの、意味が通じないものにおいて、必ず間々獲ることがある。そして分からないものは保留したまま後世の君子に委ねれば、ほぼこれに近づいたことになるだろう。

このような考え方を王國維自身最も大規模に應用したのは、『觀堂集林』卷十三に收められた「鬼方昆夷獫狁考」(二九一五年)だろうか。これは匈奴の族源を探ろうとした論考で、冒頭に結論が置かれている。

その商周時代に見えるものは、鬼方と言ひ、混夷と言ひ、獫狁と言ふ。宗周末には獫狁と言ふ。春秋に入ってから、始めてこれを戎と言ひ、繼いで狄と號す。戰國以降、またこれを稱して胡と言ひ、匈奴と言ふ。

續く論證の部分を細かく紹介する余裕は無いが、たとえば

躍動する精神(續)(井波)

「孟鼎」や「虢季子白盤」などに據りつつ、「鬼方」は本來「畏方」であるべきだとして、次のように言う。

これから見ると、漢人が隸書で經籍を寫定した時、畏方を鬼方と改めたことは、もとより怪しむに足りない。古經におけるこの一字の訂正は、細かい事に違いないが、この一字によって、鬼方と後世の諸夷との關係を知ることができるのである。それが史學にもたらした利益は、小學にもたらしたものよりも大きい。

また、「畏が鬼に、混が昆、緄、吠、犬になるのは、古代の喉牙同音である。畏が混に、鬼が昆、緄、吠、犬になるのは、古代の陰陽對轉である」という具合に、音韻學上からも「一族の稱」であることを證明しようとする。今日の水準から見れば粗雑な點も散見するとは言え、一字の解釋をもつて歴史の流れに楔を打ち込む力強さには人を壓倒するものがある。このことは繆荃孫に寄せた書簡によって深く印象づけられるだろう。

蘊公(羅振玉)がこれを繼ぎ、龜板等の新出文字も加えて、そこで『說文』の部目の誤りを悟るとともに、許

慎のいわゆる古文は壁中の書を指し、いわゆる籀文は漢代になお存在していた『史籀篇』を指すと判定したことは、實に小學における一大発見なのですが、世間ではまだこのことを知りません。このほか國邑、姓氏、制度、文物の學に有益なものは、枚舉に暇無いほどで、それが經書解釋にもたらす利益は、もとより木簡が史學にもたらす利益に劣らないのです。(一九一四年舊曆閏五月二十五日)<sup>83</sup>

のちに王國維は「史籀篇疏證」(一九一六年)を著すが、これについて内藤湖南は次のように評價する。

余はかゝる意見を有せるが故に、王靜安が文字に關する論文中、史籀篇疏證、及び漢代古文考を讀むに及びて、少しく發明する所あるを覺えたり。從來の傳ふる所にては周の宣王の大史籀が著はせる十五篇は籀文にして、之より以前に行はれしを古文といへるを、靜安は別に新説を立て古文は戰國の時まで猶行はれ、當時秦は宗周の文字を承けて、籀文を用ゐたれども、六國にては猶古文を用ゐたり。漢代に世に出でたる孔子壁

中の書の如きは、此の六國にて行はれし古文なり、籀文は周より秦に傳はりて、遂に變じて小篆と爲り、古文は齊魯等山東の諸國に行はれし者にして、其の時代は併行せりと爲し、(宗周の籀文より小篆を出せりとの説は、叔言之を發し、而して靜安之を承けたるなり。)而して史籀を以て人名に非ずとし、史籀篇とは史籀の作れる書といふ意にあらずとせる考證は、最も卓論と謂ふべし。<sup>83</sup>

「史籀篇疏證」が單に文字の由來を考察するに止まらず、廣く春秋戰國期の文化の形成にかかわる論考であることは言うまでもないだろう。籀文と古文に關しては、『觀堂集林』卷七に收められた「戰國時秦用籀文六國用古文說」から「科斗文字說」に至る九篇の論考(いずれも一九一六年)の中で改めて自説が展開されている。これには同年にまとめられた「魏石經考」や「漢魏博士考」も絡んでおり、今文古文の問題に深く立ち入ることになるわけだが、羅振玉に寄せた書簡の中で、王國維は魏の石經に觸れて、

三體の中で、古文は上は『說文』中の古文を承け、下

は隸古定『尙書』を導いておりますから、この事を考證するのめまたとても面白いのです。(一九一六年舊曆三月十八日)<sup>84</sup>

と述べ、意欲十分な所を見せている。

以上、ごく簡単ではあるが、『殷虛書契考釋』が小學に與えた影響に沿う形で王國維の業績を取り上げ、それらの最終目標はつねに古代史の解明に置かれていたことを確かめたつもりである。なお王國維の音韻學研究について、王文耀の「試論音韻學在王國維史學研究中的地位」は次のようにまとめている。

以上が王國維の音韻學研究における二つの方面の傑出した成就：一、古代の韻書及びその殘本、孤本、佚文の整理と校勘；二、古聲母、古韻母の探索と研究、である。此の外、王國維はまた傳統的な音韻學中の聲調を研究して、『五聲說』を撰し、『古音には五聲が有って、陽類一つと陰類の平上去入の四つとがそれである』と提議した；また聲母の清濁、韻母の等呼を研究したが、ここでは一々例を擧げない。<sup>85</sup>

躍動する精神(續)(井波)

第一項で言われるように、各種の唐寫本『切韻』『唐韻』の比較分析によって、王國維は王仁昉や李舟の『切韻』に高い評價を與えている(『觀堂集林』卷八に一連の論考が收められる)し、第二項の古聲母に關する業績としては「爾雅草木蟲魚鳥獸釋例」(一九一六年)や「聯綿字譜」(一九二一年)がある。ただ王文耀も指摘するように、王國維がひとときわ抜き出ているのは、音韻學を様々な分野(上古史、蒙古史、古文字學と古地名、西北地理)の研究に活用した點である。『殷虛書契考釋』にとって音韻學が一つの武器に過ぎないのと同じく、音韻學にとってもまた『殷虛書契考釋』はそれが威力を發揮する一つの材料に過ぎない。各領域が關連しながら自立していることは、スケールの大きな研究を進めていくうえでやはり不可欠なのである。

## 第五章

「殷卜辭中所見先公先王考」(『觀堂集林』卷九所收)は、一九一七年(丁巳)舊曆二月に著された。王國維の序文には次のように言う。

甲寅の歳末、上虞の羅叔言參事は殷虛書契考釋を撰し、始めて卜辭中に王亥の名前を發見した。續いて私は山海經、竹書紀年を読み、王亥は殷の先公であり、しかも世本作篇の胙、帝繫篇の核、楚辭天問の該、呂氏春秋の王氷、史記殷本紀及び三代世表の振、漢書古今人表の該と、實に同一人物であることを知った。かつてこのことを參事及び日本の内藤博士（虎次郎）に語った。參事はまた廣く甲骨中の王亥の事を記すものを集めて七八條を得、それを殷虛書契後編に載せた。博士もまた私の説を採り、あまねく考證を加えて、王亥一篇を作り、これを藝文雜誌に載せ、ならびに契以降の諸先公の名前について、この後なお卜辭中に發見することができたならば、古代史學に與える利益はきわめて大きいと言われた。私は博士の言に感じ、そこでまた卜辭に對して研究する所があった。

この序文に見える通り、王國維の指摘を受けた内藤湖南は、余は當時王靜安が説の詳細を問ふに違あらざりしも、其後支那上古史に就きて少しく研究する所あるに際し、

靜安が説を思ひ出で、尋繹の余、粗ぼ頭緒を得たれば、試みに此の一篇を草することゝなりぬ。但だ王靜安は今滬上に赴きて、此に在らざれば、就て正すに由なきを遺憾とするのみ。

と、獨自に考察を進めた結果、「王亥」については『今本竹書紀年』や『山海經大荒東經』郭璞注を引きつつ、

今の竹書紀年の注は或は此の山海經郭注より剽取せしやも知れずと思はるゝ程なれば、寧ろ郭注の引く所を以て竹書の原文に近き者とすべし。然るに此には又殷王子亥とあり。山海經本文の王亥といへるに合せ考ふるに、又史記漢書の核、該が山海經本文の王亥、郭注所引の竹書の殷王子亥なること疑なければ、王靜安が殷虛書契の王亥を以て、史記の振、竹書紀年の殷侯子亥なりとせるは、蓋し此が爲なるべし。

と判斷した。一九一六年に發表されたこの論考は、翌年の春、王國維に示されている。

余は藝文第七年第七號に於て、「王亥」一篇を草し、王靜安の説に本づきて、夏殷人の命名、並びに其の古

傳説等に關する考證を試みたが、本年春、靜安が上海より京都に至りし際、之を示して、再び其の意見を徵せしに、未だ幾くならずして、靜安は更に精細なる考證をものし、「殷卜辭中所見先公先王考」と題し、羅叔言並びに余に寄せ來れり。其文頗る長くして、盡く之を載すること能はざれども、其大意を節録して、之を本誌上に紹介するは、古史の研究に有益なるべきを信じ、仍ほ之に關する鄙見ある者は、併せて之を附記し、以て叔言靜安に質し、更に其精深なる研鑽を求めんとす。

「殷卜辭中所見先公先王考」がもたらした衝擊は、まさしく中國古代史の中樞を搖さぶるものであった。

このように王國維は、史記の股本紀などに載せられてゐる殷王朝の系圖を卜辭にあらわれる王名と比較することによって、史記などの傳える殷王の系圖がほぼ歴史的事實であることを確かめるとともに、その誤りを訂正することに成功したのである。このことは史記のような書物にみえる殷の歴史が決して荒唐無稽なもの

躍動する精神（續）（井波）

でないことを地下の史料によって證明するとともに、甲骨文字が殷代の確實な遺物であることをも證明するものである。このことは、これまでであった甲骨文字に對する疑惑をことごとく一掃するに役立ったのである。ただ王國維の考證が系圖と王名との比較を主體にしながらも、殷代の風習や制度にまで踏み込んでゐる點も見逃せない。たとえば、最初に問題となつた「王亥」の項では、派生的に二つの事柄が取り上げられてゐる。

山海經、天問、呂覽、世本は、みな王亥を始めて服牛を作つた人だとする。思うに夏の初めに奚仲が車を作つたが、なお人の力でこれを挽いていたのだろう。相土が乘馬を作り、王亥が服牛を作つて、車の用途はますます廣がつた。管子輕重戊には、殷人の王、皐牟を立て牛馬を服して、以て民の利と爲し、而して天下之に化す、と言つてゐる。考えてみるに古代の統治者の場合、その先祖にはみな天下に大いなる功徳が有る。禹が洪水を抑え、稷が嘉種を降したおかげで、夏や周が成立した。商の相土、王亥も、多分またこの類だろ

う。とすれば王亥の祭祀が盛大に行われるのも、やはり彼が制作の聖人であることによるわけで、ただ單にその先祖だからというだけではない。周秦間の王亥の傳説は、すべてここから發している。

卜辭に王亥を言うものは九つ、内その二つには祭った日が記され、どちらも辛亥である。大乙を祭るには乙日を用い、大甲を祭るには甲日を用いるのと例を同じくする。つまり王亥は確かに殷人が十二支を用いて名とする始まりなのであり、上甲微が十干を用いて名とする始まりであるのと同様である。そして殷人の名を見ると、干支を用いない者でも、また時にちなんで名をつけることが多い。契より以下、昭明、昌若、冥のごときは、みな朝暮明晦の意を含み、王恆の名もまた形象を月弦に取る。つまり時にちなんで名あるいは號をつけるのは、殷の習俗なのである。夏后氏で十干を用いて名とする者に、孔甲や履癸がいるけれども、要するに王亥及び上甲の後になる。

後の問題については、「上甲」の項でも、「殷において先祖

を祭る場合、おおむねその名とする日にこれを祭る。甲を名とする者を祭るには甲日を用い、乙を名とする者を祭るには乙日を用いる。これは卜辭の通例である」と述べている。また「祖某 父某 兄某」の項では、「商の繼承法は、弟に及ぼすことを第一とし、子に繼がせることを補助手段としており、弟が無い時に始めて子に伝える」という注目すべき見解を提出している。人名の比較検討が、そのような名前を生み出した社會制度の考察にまで領域を擴大していくのは自然な成り行きだろう。そして命名法をもその中に含んだ制度全體に關する議論が試みられるのも時間の問題である。「殷卜辭中所見先公先王考」を著したその年の舊曆九月、王國維は「殷周制度論」(『觀堂集林』卷十所收)を發表した。

「殷周制度論」は、三代や殷周といった呼稱によつて連續的に認識される二つの王朝の斷絶、別の言い方をすれば、殷周革命がもつ變革のエネルギーの大きさを、社會制度の比較を通して確認しようとする論考である。それは、「中國の政治と文化の變革で、殷周の際ほど激しいものは無

い」という刺激的な書き出しで始まり、まず「政治と文化の標徴」である都邑の問題から取り上げて、「五帝以來、都邑が東方から西方へ移るようになったのは、おそらく周から始まる」と述べ、さらに次のような結論で第一段を締めくくる。

殷周間の大變革は、表から言えば、一姓一家の興亡と都邑の移轉とに過ぎない。裏から言えば、舊制度が廢れて新制度が興り、舊文化が廢れて新文化が興るということである。また表から言えば、古代の聖人が天下を取った理由及びそれを守った理由は、後世の帝王に異ならないかに見える。けれども裏から言えば、その制度文物と立制の本意は、萬世治安の大計に出ており、その心がけと規模は、後世の帝王など夢想だにできないものであった。<sup>43</sup>

變革のポイントは次の三點に要約される。

周が天下を定めた理由を見ようとするならば、必ずその制度から始めるべきである。周人の制度で大いに商に異なるものは、第一に立子立嫡の制度である。これ

躍動する精神（續）（井波）

によって宗法及び喪服の制度を生じ、ならびに子弟を封建する制度、天子を君とし諸侯を臣とする制度ができた。第二に廟數の制度である。第三に同姓不婚の制度である。この數者は、みな周が天下を統治する手段であり、その趣旨は上下を道德に納め、天子諸侯卿大夫士庶民を合わせて一道徳の團體を形成することに在った。周公の制作の本意は、實にここに在るのである。<sup>43</sup>ここで「殷周制度論」に對する評價を云々するつもりはない。ただ殷周の交替に關して、政治革命（權力の移動）ではなく社會革命（制度の變革）の視點に立つて歴史を見直そうとし、そのことによって、言わば書齋を踏み出して何かを語ろうとしたらしい彼について觸れておきたい。「殷周制度論」が「實證的な個別研究に没頭していた王氏には珍しい概論的な、しかもきわめて明快な論文であった」<sup>44</sup>理由も、あるいはそうした點にあるのだろうか。羅振玉に寄せた書簡によると、この論考を仕上げるのに王國維はかなり苦勞したようである。<sup>45</sup>完成した直後に同じく羅振玉に寄せた書簡では、先の引用よりもやや詳細に「周公の制作の本

意」を述べた後、續けて次のように言う。

政治上の理想で、これより高遠なるものはまず無いでしょう。全部で十九頁になりましたが、この論文は考證の中に經世の意を寓しており、亭林先生に近いと言えます。ただ文章は十分に練り上げる所までいきませんでした。(一九一七年舊曆七月二十七日)<sup>46)</sup>

王國維は「周公の制作の本意」、すなわち「天子諸侯卿大夫士庶民を合わせて一道徳の團體を形成する」というその「道徳」が、今日に至るまで中國社會を規定し續けて來たという認識をもっているのではないか。さらには、眼前の事態を歓迎するかどうかはともかくとして、清末民國初という時代を股周交替期に匹敵する社會變革の時代ととらえていたのかも知れない。

そもそも王國維は時代の根本的變革、つまり歴史における非連續の連續を見抜くことに長けていた。それはまた一つの時代の劃期的意義を明快に指摘することでもある。

『靜安文集』に收められた「論近年之學術界」(一九〇四年)の冒頭で展開した中國學術史の概括、『人間詞話』にお

ける北宋詞と南宋詞の區別などはその早い例に屬するだろう。さらに元曲を「一代の文學」にまで高めた『宋元戲曲考』もそうした性格を持つ。「股周制度論」を著した前年、彼は羅振玉に寄せた書簡の中で、

連日前四史をあっちこち調べた結果、各經に博士を立てたという事實にはすこぶる研究の餘地があり、前人の解説には往々にしてまだ明快でない箇所があると感じました。また『魏志高貴鄉公紀』を細讀して、魏の時代すでに馬(融)、鄭(玄)の『古文尙書』に博士を立てていたこと、さらに魏が立てた諸經はほとんど後漢末の諸家を用い、漢代のものとは全然違うことを知りましたが、そうなると魏の石經に刻された『尙書』はひよっとしたら馬、鄭本を用いたのかも知れないということになるわけで、これまた魏の石經に關係する事柄です。(一九一六年舊曆七月十七日)<sup>47)</sup>

と述べている。そしてこれが實を結んだ「漢魏博士考」(『觀堂集林』卷四所收)では、

學術の變遷が際立つことでは、三國以上に激しい時代



は無い。だが從來このことを明言した人はいない。これは不思議である。<sup>48</sup>

と、「殷周制度論」の冒頭を彷彿とさせるような見解を披露している。こうした表現法は一つの特徴の中に時代個性が集約されるような効果を發揮し、王國維の得意とする所だったらしい。他にも「周代金石文韻讀序」(『觀堂集林』卷八所收)では、

漢以後、學術の隆盛という點で、最近三百年に勝る時代は無い。この三百年の間に、經學史學はともに前の時代を凌駕した。そしてその中で最も卓越したものは  
と言えば、それは小學である。<sup>49</sup>

「宋三司布帛尺摹本跋」(『觀堂集林』卷十九所收)では、

尺度の制を考えるに、短いものが長くなるのは、ほぼ定例である。ただその増加率の速さとなると、西晋から後魏までの期間より激しい時代は無い。<sup>50</sup>

と言う。また後に「最近二三十年中中國新發見之學問」(一九二五年)の中で、「今日の時代は、これを發見の時代と言うことができる」と語ったことは有名だし、『靜安文集

續編』に收められた「宋代之金石學」(一九二六年)の冒頭でも、宋代の學術の特徴を鮮やかにまとめている。

宋代の學術は、分野の増加が最も多く進歩の程度もまた最も著しい。哲學においては、始めに劉敞、歐陽脩等があり、漢唐の舊注の桎梏を脱して、新しい觀點から經書を解釋し、後には周敦頤、程顥、程頤、張載、邵雍、朱熹の諸大家があり、盛んな勢いで宋代の哲學を作り上げた。科學においては、沈括、李誠等があり、曆數物理工藝において、いずれも發明が有った。史學においては、司馬光、洪邁、袁樞等があり、各々膨大な著述をものした。繪畫では董源以降、始めて唐人の畫工の畫を變化させて、士大夫の畫を描いた。詩歌においては、兼ねて技術の美も重視し、唐人の自然の美を重視する氣風とは、手法をまったく異にする。考證の學も宋に入ってから大いに盛んになった。だから宋代の才智の活動ぶりと文化の多様性は、以前の漢唐も、以後の元明も、みな及ばない所なのである。近世の學術は、多く宋人に端を發している。たとえば金石學も宋

人が立てた學術の一つである。宋人はこの學を治めるや、その蒐集著錄考訂應用の各方面において、いずれも精力を傾け、百年に満たない間に、一種の學問を形成したのである。<sup>(6)</sup>

王國維は變革というものを歴史における必然的な事柄として受け止めている。だがそれは傳統や制度を一概に否定し去る軽々しい作業ではない。かつて傳統や制度を生み出した本來の力を自分自身のうちに奪い返し、人間の生の充實が傳統や制度として現實化される過程を新しい條件の下で絶えず創造することなのである。それは歴史の再構成を試みることによって過去の時代にまで及ぶ。「發見の時代」は、時間や空間によって隔てられた現在と過去に生き生きとした關係を取り戻させるのである。

ところで『流沙墜簡』における『水經注』の位置を占める文獻として、「殷卜辭中所見先公先王考」には『竹書紀年』がある。王國維は「古本竹書紀年輯校」と「今本竹書紀年疏證」（いずれも一九一七年）を著してこの文獻の整理に努めた。「古本竹書紀年輯校自序」（『觀堂別集』卷四所收）に

は次のように言う。

汲冢竹書紀年は兩宋の際に佚した。今本二卷は、後人が蒐輯したものである。史記、通鑑、外紀、路史諸書から雜然と採録して作っており、汲冢の原書ではない。だが世に別本が無いことから、三百年來、學者はこれを熱心に研究し、臨海の洪氏頤煊、棲霞の郝氏懿行、閩縣的林氏春溥の三校本が、最も典雅である。最後に嘉定の朱氏右曾が、またもっぱら古書が引く紀年の文章を輯め、汲冢紀年存眞二卷を作った。思うにその書は世間にほとんど傳わっていない。私は以前に上虞羅氏の大雲書庫で、これを借りて讀み、心が震えおののいた。丁巳二月、私は殷先公先王考を作り終えた後、この書を研究しようと思ひ立ち、そこで今本紀年を取り、一つ一つその出處を簡條書にして、書眉に注した。また朱氏の輯本を借り得てからは、それがまだ詳細を極めておらず、指摘された諸書の異同も、すべてを列舉したわけではなく、その取捨選擇についても、得失が無いとは言えないことを不満に思ひ、そこで朱書を

底本とし、私の校注で補正して、若干の箇所を増刪改正した。私がこの書を読んで考證した點については、

別に札記を作る必要があり、これに引き續いてきちんと文章にするつもりである。<sup>(5)</sup>

これもまた出土資料と從來の文獻の相互補完的な關係を示す恰好の例だろう。「今本竹書紀年疏證」の方は、惠棟の『古文尚書考』や孫志祖の『孔子家語疏證』に範を仰いで各條の出典を求め、「今本が載せる記事で他の書物を襲用しないものなど一つも無い。他の書物に見えないものは、百分の一に過ぎず、またおおむね内容空虚で事實無根であり、増やしたのは年月だけに過ぎない」（自序）ことを立證した。これは必ずしも必要な作業ではないが、後に再び『今本竹書紀年』の價值が稱揚される可能性を封じるために書かれたのである。それゆえ序文の主張はやや極端に傾いている。しかしだからと言って、待ってましたとばかりに、その原因をカントやシヨウベンハウアーにまで遡って穿鑿し、彼の「ブルジョア階級の形式主義的方法」に責任をなすりつけるのは行き過ぎだろう。<sup>(6)</sup>

躍動する精神（續）（井波）

## 第六章

晩年の王國維は蒙古史の研究に精力を傾けた。「年譜」によれば、

### 乙丑四十九歲

正月、先生は（溥儀に）召されて日本公使館に行き、直接に諭旨を賜って清華學校研究院の招聘に應じるよう命じられた。（中略）

この歳の春、始めて西北地理及び元史の學を研究することを志す。四月、『通典』より杜環『經行記』を抄出し、『太平寰宇記』が引く所によって校勘する。また『五代史』より高居誨『使于闐記』を抄出する。『宋史外國傳』より王延德『使高昌記』を抄出し、ならびに王明清『揮塵前錄』が引く所によって校勘する。また『吳船錄』より繼業『三藏行記』を抄出する。『庶齋老學叢談』より耶律文正『西遊錄』を抄出する。陶九成『游志續編』より劉祁『北使記』を抄出する。また明刊『秋澗大全文集』卷九

十四の『玉堂嘉話』より、劉郁『西使記』を抄出し、ならびに四庫本によって校勘する。全部で古行記七種を得、一冊に装訂して参閱に備える。<sup>64</sup>

西北地理に關しては、錢大昕や徐松以來數多くの論考があり、決して王國維の獨擅場ではないが、吳其昌が

先生の著作は、その中の一小部分を占めるに過ぎない。だが先生の治學の標準はと言えば、精確を求めて廣闊を求めない；専門を求めて閼通を求めない；偏狹のせいで誤つても、宏大のせいでは誤らない；瑣末のせいで誤つても、大雜把のせいでは誤らない、である。だからその氣魄は、すぐれた業績を残した何願船（秋濤）、魏默深（源）、李仲約（文田）、柯鳳蓀（劭恣）たちには遠く及ばないにしても、その専門性や精確さとなると、各々すこぶる長短が有り、（先生にも）諸家の追隨を許さぬ點が存在する。<sup>65</sup>

と言うように、彼は自分に合ったポジションを確實にこなしたのである。余大鈞の「論王國維對蒙古史的研究」<sup>66</sup>によれば、北京圖書館には彼が批校を加えた蒙古關係の古籍が

二十二種『元朝秘史』から『元刊古今雜劇』まで）收められているという。さらに余氏は王國維の研究方法の特徴を次の六點にまとめている。

一：史籍を整理校勘し、散見する資料を収集し、隨時眉批、校語、跋語等を記すという學術研究の基礎作業に長期にわたって眞劍に従事した。（たとえば「聖武親征錄校注」）

二：彼の研究は大量の基礎作業から始められ、順を追つて漸進的に完成された。（たとえば「古行記校注」）

三：研究が大量の基礎作業から着手されることにより、彼の論著は仔細に校勘した最も直接の資料に基づいて書かれた。（たとえば「韃靼考」）

四：彼の論著ができる限り多方面の最も直接の材料を把握して書かれることにより、往々にして比較、分析或いは聯繫、綜合の中から重要な問題を發見し、独自の鋭い見解を發表することができた。（たとえば「鬼方昆夷獵抗考」）

五：廣く前人及び同時代人の研究成果を參考にした。

六：いくつもの研究作業が交錯して進行し、何度も修改し、補充して完全なものとなった。

「國維は近年少しばかり遼金元三朝の事を研究しておりますが、この分野の書籍に對しては、國內國外を問わず、ひじょうに不備を感じます」（致藤田博士書二）と述べるように、蒙古史の研究は何よりもまず資料を收集整理することから始めねばならなかった。

今年の夏には『長春眞人西游記』のために注を作り、また「耶律文正年譜」を作りましたが、どちらもまだ最終稿には至っておりません。元の歴史には平素から留意しておらず、そこで小學生同然なのですが、面白く感じています。（一九二五年舊曆七月五日馬衡宛<sup>(57)</sup>）

先生が以前印刷なさった『黑韃事略』にまだ殘部がございましたら、どうか一部お譲り下さい。（中略）李文誠（文田）の『元祕史注』には誤りがとても多く、彼の他の著作と變わりないというのに、培老（沈曾植）がその人を絶賛するのは、本當に不可解です。（一九二五年舊曆十一月一日 羅振玉宛<sup>(58)</sup>）

躍動する精神（續）（井波）

近ごろ小生が著した「皇元聖武親征錄校注」一卷、「長春眞人西游記注」二卷、「蒙韃備錄」、「黑韃事略箋證」各一卷、ならびに「韃靼考」、「遼金時蒙古考」諸種を、併せて小叢書とし、排印しました。（一九二六年舊曆五月二十日 神田喜一郎宛<sup>(59)</sup>）

耶律文正の『西遊錄』もついにその足本が見つかったようですが、まことにいわゆる人を驚かす祕籍とあれば、それを聞いて喜び跳ねること三百回でした。（一九二六年舊曆六月十九日 神田喜一郎宛<sup>(60)</sup>）

『西游錄』の頁數は多くないと思うのですが、人に頼んで一本を傳鈔してもらえようか。（一九二六年舊曆七月十七日 神田喜一郎宛<sup>(61)</sup>）

『西游錄』の足本はすでに印刷中だと聞いて大變嬉しく思います。小生が著した「親征錄校注」はひどく草卒ですが、『說郛』本を紹介することが目標だったものですから、那珂博士の校注本が有るのを知らないばかりでなく、知服齋本すら目にし得ないままです。

（一九二六年舊曆八月八日 神田喜一郎宛<sup>(62)</sup>）

『蒙韃備錄』と『黑韃事略』の兩箋は、近ごろひじょうにたくさん増補しましたし、「遼金時蒙古考」も改作せねばならないというわけで、あの時點で出版したのは早すぎたと深く後悔しています。けれどもこの原本が無かったならば、必ずしも努力して改定しなかったでしょう。(一九二六年舊曆十二月十二日 神田喜一郎宛<sup>(64)</sup>)

近ごろ蒙古初期の史料を研究して、南宋人が多くの書籍を偽造したことを知りました、たとえば『征蒙記』などはみな宋人がこしらえたものです。(一九二六年舊曆十二月 馬衡宛<sup>(64)</sup>)

近ごろ「元朝秘史之主因種考」一篇を作り、『秘史』が記す主因種について、その事實は金末の虜軍とまったく合致することから、主因は虜軍の對音ではないかと疑いました。この論考ではただ兩者が合致する事實を提出しただけで、虜の音義に對する鄙見は、別に藤田博士に寄せた書簡に見えます。博士はかつて『史學雜誌』に代わって小生の文章を求められたため、この稿を書いて送ったのですが、残念ながら筋内、羽田諸

先生の考えを全部見ることはできませんでした。(一九二七年舊曆二月七日 神田喜一郎宛<sup>(65)</sup>)

このように、書簡の文章を時代順に任意に拾い出してみただけでも王國維の地道な努力が偲ばれるだろう。また『觀堂集林』卷十六に收められた「聖武親征錄校注序」(一九二六年)においても、

幸いこの書の祖先に當たる秘史と兄弟に當たる拉施特  
の書、子孫に當たる元史及び當時の文獻は、なお參照  
することができ。そこで取り上げて比較し、その異  
同を存し、ならびにあらましその事實を簡條書にして、  
校注一卷を作った。<sup>(66)</sup>

と、あくまで手堅い。そして『觀堂集林』卷十五に收められた「萌古考」(一九二七年)の中で、

私は近ごろ韃靼の事を考え、遼金二史の中に發見を待  
つ覆われたものが有ることを知った。そこで蒙古上世  
の事實を收集列舉し、これを疏通照明した。歴史を讀  
む人々の一助になればと思う。<sup>(67)</sup>

と述べるように、この分野においても從來よく知られてい

る文獻を含む「發見を待つ覆われたもの」、言うなれば潛在的可能性を發揮させることが大切なのである。さらに余大鈞の次のような指摘も確認しておかねばならない。

上述の一九二五年四月下旬から一九二七年五月に至るこの二年一箇月の間に、王國維は上述の蒙元史、西北地理方面の大量の研究作業を成し遂げたのみならず、さらにまたたくさんの時間を割いて學生の爲に「古史新證」「尚書」「說文」「儀禮」等の多くの課程を講授し、清華學校暑期學校、北京歷史社會學會、燕京大學のために各種の學術報告を行い、並びに「克鼎銘考釋」(一九二六年春)、「孟鼎銘考釋」(一九二六年春)、「最近二三十年中中國新發見之學問」(一九二五年八月)、「記現存歷代尺度十七種」(一九二六年七月八月)、「鄂侯鬲方鼎跋」(一九二五年十一月十二月)、「秦瓦量跋」(一九二五年十一月十二月)、「新莽嘉量跋」(一九二六年九月十月)、「六朝人韻書分部說」(一九二六年秋)、「宋代之金石學」(一九二六年十一月)、「蜀石經殘拓本跋」(一九二六年十一月)、「校本水經注箋跋」(一九二七年三月)、「尙

躍動する精神(續)(井波)

書核詁序」(一九二七年五月)、「古史新證」の講義などといった蒙元史、西北地理以外のその他の學術研究領域の多くの論著を書き上げており、その中には重要な學術論著が多數有る。<sup>(8)</sup>

一九一九年舊曆七月二十二日、羅振玉に寄せた書簡の中で王國維はベリオの演說に觸れ、「新疆南北路では古代において波斯一派の言語文字が多く行われた、というこの發明は至って重要である」と注意を促しているが、これが「最近二三十年中中國新發見之學問」(『靜安文集續編』所收)において五番目に講ぜられた「中國境內之古外族遺文」の基礎を成す。

中國の境域内に古今居住する異民族は大變多い。古代の匈奴、鮮卑、突厥、回紇、契丹、西夏の諸國は、いづれも國を中國北邊に立てており、その遺物はすこぶる現存している。しかし世間にはほとんど知られていない。<sup>(9)</sup>

これらの諸民族に對する研究は獨自性を保ちながらも、同時に中國史の有機的な一部分を構成する。逆に言えば、中

國史は諸民族に對する研究を缺いては成り立たないのである。一九二二年舊曆十月二十四日、馬衡に寄せた書簡の中で王國維は次のように勧めている。

現在大學には滿蒙藏文の講座が有るでしようか？ これはわが國がどうしても設置しなくてはならないものです。それに次いで東方の古代國家の文字學が重要です。<sup>(m)</sup>

この提案は學術の將來に對する彼の展望そのものだと言えよう。

### おわりに

王國維の旅はつねに根源を目指すものであった。無論そのスタイルは必ずしも輕快とは言ひ難い。衝擊的で力強さに溢れてはいるものの、資料を積み重ね、そこに隠された事實を追いつめていくその仕事ぶりは、どちらかと言えば地味でごつごつした感じを與える。しかし根源を目指す旅とは本來そういうものではあるまいか。王國維が資料を整理し、それを徹底的に読み抜いたことの意味は、たとえば、

ベンヤミンの『一方通路』に收められた次のような文章によつて最も深く理解されるような氣がする。街道を旅する者について、彼は言う。

飛行者の眼には、ただ單に廣がつた平地としか映らぬ地帯から、道路がその曲折のつど、遠景だの、見晴らし場所だの、林間の空き地だの、見事な眺望だのをつぎつぎ手許へ引き寄せるさまには、ちやうど號令一下前線から兵士を召還する指揮官の趣きがあり、これは歩かなければわからない。それと同じことで、原典は書き寫されてこそ、それに精神を集中した者の魂に號令をかけるのであつて、ただの讀者というものは、書物の内部に展開する新しい眺望をついに識ることはない。つまり、原典が、あの歩み進むほどに鬱蒼と深まりゆく原始林のなかをぬって走る街道さながらに、自らの中心部にむかつて道をきり拓いてゆく姿を見ることはないわけだ。(『中國物産店』山本雅昭・幅健志譯<sup>(m)</sup>)

踏み出す足と支える足のバランスが取れて始めて人は前に進むことができる。中國がこれからどこへ向かうにせよ、



「いま—ここ」にある中國を支えてきたものを顧みることなくして本當の一步はあり得ない。これは改めて言うまでもないだろう。では王國維はそこに何を見出そうとしたのか。彼は支える足がかつて踏み出す足であったことに深くこだわったのである。中國文化をできあがったものとして受け取る姿勢から生じる擁護や批判、あるいは兩者を折衷したいいわゆる「前向き」の意見など、彼には關係なかった。支える足の内部に踏み出す足の躍動感を感じ取る——その時こそ歴史は單なる累積ではなくなり、その複雑さと多様性を思いがけない形で見せてくれる。王國維はそうした瞬間を次々にとらえていったと言えるよう。

どれも極めて貧弱なものでしかないが、とにかく學術史、文學、史學という順番で、王國維の評價を試みてきた。あらゆる分野にわたって大きな足跡を残した彼の全體像を描き出すことはまことに容易ではない。そのことだけは痛切に感じる。まだ取り上げていない分野として、彼にとって最も基礎的な作業の一つ——『傳書堂藏善本書志』を中心

躍動する精神（續）（井波）

とした目録學があるが、これについてはまた改めて考えてみたい。

#### 主要參考文獻

『王國維遺書』（上海古籍書店 一九八三年）

『觀堂集林』（中華書局 一九八四年）

『王國維全集 書信』（中華書局 一九八四年） 後の注では『書信』と稱す。

この書の編集上の問題点については、一丁『王國維全集』書信卷在編次、標點等方面的問題」（『古籍整理與研究』一九八七年第一期所收）に詳細な指摘があるが、本稿で引用した箇所はそれに該當しない。

洪國樑『王國維著述編年提要』（大安出版社 一九八九年）

『王國維學術研究論集』（華東師範大學出版社）第一輯（一九八三年）、第二輯（八七年） 後の注では『論集』と稱す。

#### 注

- (1) 蕭艾『王國維評傳』（浙江文藝出版社 一九八三年）一六一頁。
- (2) 尼山之學在信古。今人則信今而疑古。國朝學者疑古文尙書、疑尙書孔注、疑家語。所疑固未嘗不當。及大名崔氏著考信錄、則多疑所不必疑矣。至於晚近、變本加厲、至謂諸經皆出偽造。至歐西之學、其立論多似周秦諸子、若尼宋諸家學說、賤仁義、

薄謙遜、非節制。欲觀新文化以代舊文化、則流弊滋多。方今世論益歧、三千年之教澤不絕如綫、非矯枉不能反經。士生今日、萬事無可爲、欲拯此橫流、舍反經信古末由也。公方年壯、予亦未至衰暮、守先待後、期與子共勉之。公聞而僂然自歎、以前所學未醇、乃取行篋靜安文集百餘冊、悉摧燒之、欲北面稱弟子。予以東原之於茂堂者謝之。其遷善徙義之勇如此。

《藝文》第拾八年第八號所收)

- (3) 我認爲這是羅振玉編造出來的騙人鬼話。因爲該遺老在一九二三年爲『觀堂集林』作序時、隻字未提燒毀『靜安文集』的事、那時王氏還在、他不好意思當面造謠。等到編王氏遺書時、王氏已不在人間、死無對證、他就可以信口胡說。此不可信者一。『靜安文集』曾由上海商務印書館代售、一九二〇、一九二一年的『圖書匯報』上、還赫然留着『靜安文集』之名。王氏于行篋中的『靜安文集』既已燒毀于前、于商務代售的『靜安文集』則任其流傳于外、天下寧有此理？此不可信者二。尼采、叔本華學說之引人注意、小說戲曲之爲文學家所重視、都是『五四』以後的事、羅氏勸王氏之專治小學訓詁是在辛亥年。辛亥革命只是政體換了一個形式、至于上層建築的文化、並沒有根本動搖。當時的革命黨人如章炳麟、劉師培等、都以精研小學馳名當世。并且章氏是篤信古文經的、并不屬於疑古派。在當時、羅氏作爲清室的遺老、所痛心的應該是清室的傾覆、而不是舊文化的滅亡！羅氏對王氏勸告的話、發之于『五四』以後、還對得上口；發之于所謂『辛亥國變』之時、

未免牛頭不對馬嘴。大概該遺老鑒于『五四』後西洋文化之輸入、白話文之盛行、覺得歷古相傳的孔孟之道快要斷絕了。而『靜安文集』論衡文學、哲學之作、頗有爲新文化運動推波助瀾的作用、因此、他不願意使之流布人間、才故意捏造王氏自己燒毀的話、來欺騙世人。只可惜沒有注意到他自己立說的破綻。此不可信者三。（『王國維學術思想評價』『論集』第一輯四三一頁）

- (4) 「王靜安君を憶ふ」（狩野直喜『支那學文叢』みすず書房一九七三年 三六八頁）

(5) 半月以後、移居吉田町神樂岡八番地、背吉田山、面如意嶽、而羅、董二公新居極近、地亦幽勝、惟去市略遠耳。移居以後、日讀注疏一卷、擬自三禮始、以及他經、期以不間斷、不知能持久否。（『書信』三五頁）

(6) 是歲圈點三禮、細讀一過、並時作疏記。自二月初九日起、至三月十八日、讀『周禮注疏』畢。先生自跋注疏本後云：「此時注意於疏、而於經注反覺茫然。」自四月二十一日起、至六月九日、讀『儀禮注疏』畢。日盡一卷、中二日盡二卷、幸無間讀。又自八月十一日起、至十月十二日、讀『禮記注疏』畢。並跋其後云：「冲遠此疏、除大典制尙存魏晉六朝古說外、可取殊少、其敷衍經旨處、乃類高頭講章、令人生厭、不及賈氏二禮疏遠甚、若去其無稽、存其菁英、亦經義得失之林也。」先生讀三禮時、又圈讀段茂堂『說文解字注』一過。自二月十七日起、至三月十二日畢第三篇。時因作「明堂寢廟通考」、

中斷四十餘日。四月二十六日起，至五月下旬，又畢第七卷及第十五卷。七卷以下，瀏覽一過，不復圈校，蓋當時又治他業一故也。『國學論叢』第一卷第三號「王靜安先生紀念號」九七頁）

- (7) 自宋人始爲金石之學，歐、趙、黃、洪各據古代遺文以證經考史，咸有創獲。然塗術雖啓，而流派未安。近二百年始益光大，於是三古遺物應世而出。金石之出於邱隴窟穴者，既數十倍於往昔。此外，如洹陰之甲骨，燕齊之陶器，西域之簡牘，巴蜀齊魯之封泥，皆出於近數十年間，而金石之名乃不足以該之矣。之數者，其數量之多，年代之古，與金石同，其足以考經證史，亦與金石同，皆古人所不及見也。

- (8) 至於考證地理，所裨尤多。以建置言之，則此編中郡守封泥有臨菑，濟北二郡，太守封泥有河間，卽墨二郡，都尉封泥有城陽一郡，皆漢志所無。

- (9) 惟臨菑守一印，則齊國既建之後，當稱內史。國除之後，又當稱齊郡太守。此印云臨菑守，必在高帝初葉，悼惠王未封之時。且臨菑二字，猶當爲秦郡之名也。夫始皇既滅六國，所置諸郡，無卽以其國名之者。東郡不云衛郡，潁川不云韓郡，邯鄲不云趙郡。何獨臨菑乃稱齊郡。然則漢之初郡，必襲秦名，則班固以齊郡爲秦郡而不云故秦臨菑郡者，非也。

- (10) 凡此數端，皆足以存一代之故，發千載之覆，決聚訟之疑，正沿襲之誤，其於史學裨補非鮮。

- (11) 近爲龔公編『封泥集存』，因考兩漢地理，始知『漢志』之

躍動する精神（續）（井波）

疎，成「秦郡考」「漢郡考」二文。自謂自裴駰以後，至國朝全、錢、姚諸家之爭訟，至是一決。『書信』三七頁）

- (12) 皆求以足漢志二十六之數。其是非暫置勿論，要皆以班氏之說爲信而不可易也。豈獨此數家而已。自來讀漢書者，殆無不以班氏之說爲信而不可易也。自余考之，則上所舉二十六郡國，其眞爲高帝置者曾不及三分之一，而世人莫之察焉。是可異已。
- (13) 至漢志所謂高帝增二十六郡國、文、景各六者，參以史漢紀傳，無一相合。而自來未有理而董之者，此則余所大惑不解也。
- (14) 作史者但據後世成籍，略紀沿革而已。故但據漢志之文以求漢初諸侯之疆域，則其大小廣狹，不能與實際同日而語。

- (15) 正月，「屯戍養殘考釋」，草稿已具。合羅先生所撰考釋，次第校錄，至四月寫畢。羅先生即據先生手寫本付石印，署名『流沙墜簡』。先生復爲序以考木簡出土之地，文長數萬字，實爲近代研究西陲古地理第一篇文字。（注(6)九八頁）

- (16) 歲首與蘊公同考釋『流沙墜簡』，並自行寫定，殆盡三四月之力爲之。此事關係漢代史事極大，並現存之漢碑數十通亦不足以比之。東人不知，乃惜其中少古書，豈知紀史籍所不紀之事，更比古書爲可貴乎。考釋雖草草具稿，自謂於地理上裨益最多，其餘關乎制度名物者亦頗有創獲，使竹汀先生輩操觚，恐亦不過如是。『書信』四〇頁）

- (17) 中國有一部『流沙墜簡』，印了將有十年了。要談國學，那纔可以算一種研究國學的書。開首有一篇長序，是王國維先生做的，要談國學，他才可以算一個研究國學的人物。（不懂的

音譯)

- (18) 當然，隨着新漢簡的不斷發現，漢史研究的全面展開，也會發現王國維的某些疏誤的考釋和論證，從而對之有所匡正和補充；然而，王國維先生韋路藍縷的功勞是不會泯滅的。（簡修煊·章義和「王國維漢簡研究述論」《論集》第二輯一七二頁）
- (19) 陳橋驛「王國維與『水經注』」（《中華文史論叢》一九八九年第二期一四一—一六頁）
- (20) 由于『水經注』是研究古代史地的重要資料，王國維非常重視這部著作，在他從事中國古史的研究和考證時，就應用其中所載的資料。他的很多著作，都是和掌握了『水經注』中的有關資料分不開的。他校勘『水經注』也是比較早的。一九一六年舊曆三月，他在致羅振玉的信中即提到這一件事，并且就在四月，即手臨沈曾植（乙庵）校吳縣曹氏舊藏殘宋本『水經注』卷三十九之半及四十，沈校本本于明嘉靖年間黃省曾刊本上，王國維則移錄于趙一清『水經注釋』本內。一九二二年至一九二五年期間，他又借到『水經注』宋刊殘本、大典本、明抄本等等，又陸續進行校勘。
- (21) 所以王氏的工作，不僅是一種校勘工作，同時也是一種整理鄭學史的工作。王氏以前的鄭注校勘者，在這方面實無可稱道，所以王氏在這方面的成績特別值得重視。（注(19)二一〇頁）
- (22) 其王號冠以親魏親晉字而不直云魏晉者，所以示其非純臣也。右二簡所存不及三十字，而足以裨益史事者如此。然非知此二簡爲一書，亦不能有所啓發矣。

(24) 此背記書於咸通間，距太和末廿餘年，距大中不過數年，已有此二調。雖別字聲病滿紙皆是，可見沙州一隅，自大中內屬後，又頗接中原最新文化也。

(25) 『中華文史論叢』一九八八年第一期所收。

(26) 余爲商遺先生書殷虛考釋，竟作而歎曰：此三百年來小學之一結束也。夫先生之於書契文字，其蒐集流通之功，蓋不在考釋下。即以考釋言，其有功於經史諸學者，蓋不讓於小學。以小學言，其有功於篆文者，亦不讓於古文。然以考釋之根柢在文字，書契之文字爲古文故，姑就古文言之。我朝學術所以超越前代者，小學而已。順康之間，崑山顧亭林先生，實始爲說文音韻之學。說文之學，至金壇段氏而洞其奧。古韻之學，經江、戴諸氏，至曲阜孔氏，高郵王氏而盡其微，而王氏父子與婁霞郝氏，復運用之。於是詁訓之學大明。使世無所謂古文者，謂小學至此觀止焉可矣。古文之學，萌芽於乾嘉之際，其時大師宿儒或殫謝，或篤老，未遑從事斯業。儀徵一書，亦第祖述宋人，略加銓次而已。而俗儒鄙夫不通字例，未習舊藝者，輒以古文所託者高，知之者鮮，利荊棘之未開，謂鬼魅之易畫，遂乃肆其私臆，無所忌憚，至莊葆琛、龔定庵、陳頌南之徒，而古文之厄極矣。近惟瑞安孫氏，頗守矩矱，吳縣吳氏，獨具縣解，顧未有創通條例，開發奧窔，如段君之於說文、戴、段、王、郝諸君事於聲音訓詁者。余嘗恨以段君之遠於文字，而不及多見古文，以吳君之才識不後於段君，而累於一官，不獲如段君之優游講考以竟其學，遂使我朝古文之學不能與詁訓說文

古韻三者方駕。豈不惜哉。先生早歲卽治文字故訓、繼乃博綜羣籍、多識古器。其才與識固段吳二君之儔、至於從容問學、厭飫墳典、則吳君之有志而未逮者也。而此書契文字者、又段吳二君之所不及見也。物既需人、人亦需物。書契之出、適當先生之世、天其欲昌我朝古文之學、使與詰訓說文古韻匹、抑又可知也。

- (27) 先生之治古史、以小學爲出發點之根據、已約述如前矣。然於小學之中、又有其根據點與出發點焉。當清盛時小學專家：若段若臈一派、則以『說文』爲根據、以貫串羣經。郝蘭皋一派、則以『爾雅』爲根據、從名物以逆推小學。王石臈一派、則先從羣經着手、而歸宿於『說文』。近世章太炎一派、則從音韻以上探小學之本原。而先生一派、則欲先從契、古、籀等文字着手、而歸宿於『說文』。其程次適與段君相反、而與王君相合；故先生之學、雖極如程、吳、孫諸君、而先生之於小學、則矢口佩誦王君不置、今細讀『觀堂集林』可見也。但王君之治學目的在通經、故從羣經以發軔；而先生之目的在考史、故從古文字學發軔；其以『說文』爲證合之關鍵、則一也。故先生之學、其目的則在古史；其根據則在小學。其於小學也、其關鍵則在『說文』；其根據則在古文字學。此數言可蔽也。今試舉一例言之：如先生從龜甲文字、證合古今、更以『說文』爲樞紐、以考商代之帝嚳是也。『國學論叢』第一卷第三號「王靜安先生紀念號」一八八頁）
- (28) 文無古今、未有不文從字順者。今日通行文字、人人能讀之

躍動する精神（續）（井波）

能解之。詩書彝器亦古之通行文字。今日難讀者、由今人之知古代不如知現代之深故也。苟考之史事與制度文物以知其時代之情狀、本之詩書以求其文之義例、考之古音以通其義之假借、參之彝器以驗其文字之變化、由此而之彼、卽甲以推乙、則於字之不可釋、義之不可通者、必間有獲焉。闕其不可知者以俟後之君子、則庶乎其近之矣。

- (29) 其見於商周間者、曰鬼方、曰混夷、曰玁狁。其在宗周之季、則曰玁狁。入春秋後、則始謂之戎、繼號曰狄。戰國以降、又稱之曰胡、曰匈奴。
- (30) 由是觀之、漢人以隸書寫定經籍時、改畏方爲鬼方、固不足怪。此古經中一字之訂正、雖爲細事、然由此一字、可知鬼方與後世諸夷關係。其有裨於史學者、較紳於小學者爲大也。
- (31) 李瑾「論殷周犬戎族屬及其有關問題——王靜安先生『鬼方昆夷玁狁考』質疑」（『論集』第二輯所收）參照。
- (32) 蘊公繼之、加以龜板等新出文字、乃悟『說文』部目之誤、並定許所謂古文指壁中書、所謂籀文指漢代尙存之『史籀篇』、此實小學上一大發見、而世尙未之知也。此外有裨於國邑、姓氏、制度、文物之學者、不勝枚舉；其有益於釋經、固不下木簡之有益於史也。（『書信』四一頁）
- (33) 「續王亥」（『內藤湖南全集』第七卷「讀史叢錄」筑摩書房一九七〇年 四九五頁）
- (34) 三體中、古文上承『說文』中古文、下啓隸古定『尙書』、考證此事亦極有趣味也。（『書信』六六頁）

(35) 以上就是王國維在音韻學研究上的兩方面傑出成就：一、古代韻書及其殘本、孤本、佚文的整理與校勘；二、古聲母、古韻母的探索和研究。此外，王國維還研究了傳統音韻學中的聲調、撰「五聲說」、提出「古音有五聲、陽類一與陰類之平上去入四是也」；也研究了聲母的清濁、韻母的等呼、此不一一例舉。《論集》第二輯二〇六頁。

(36) 甲寅歲莫、上虞羅叔言參事撰殷虛書契考釋、始於卜辭中發見王亥之名。嗣余讀山海經、竹書紀年、乃知王亥為殷之先公、并與世本作篇之核、帝繫篇之核、楚辭天問之該、呂氏春秋之王冰、史記股本紀及三代世表之振、漢書古今人表之核、實係一人。當以此語參事及日本內藤博士（虎次郎）。參事復博蒐甲骨中之紀王亥事者得七八條、載之殷虛書契後編。博士亦采余說、旁加考證、作王亥一篇、載諸藝文雜誌、并謂自契以降諸先公之名、苟後此尙得於卜辭中發見之、則有裨於古史學者當尤鉅。余感博士言、乃復就卜辭有所攻究。

(37) 「王亥」(注33四六九頁)

(38) 同前四七一頁。

(39) 「續王亥」(注33四八一頁)

(40) 貝塚茂樹編『古代殷帝國』(みすず書房 一九五八年) 五四頁。

(41) 是山海經、天問、呂覽、世本、皆以王亥為始作服牛之人。蓋夏初奚仲作車、或尙以人挽之。至相土作乘馬、王亥作服牛、而車之用益廣。管子輕重戊云、殷人之王、立帛牢服牛馬、以

爲民利、而天下化之。蓋古之有天下者、其先皆有大功德於天下。禹抑鴻水、稷降嘉種、爰啓夏周。商之相土、王亥、蓋亦其禱。然則王亥祀典之隆、亦以其爲制作之聖人、非徒以其爲先祖。周秦間王亥之傳說、胥由是起也。

卜辭言王亥者九、其二有祭日、皆以辛亥。與祭大乙用乙日、祭大甲用甲日同例。是王亥確爲殷人以辰爲名之始、猶上甲微之爲以日爲名之始也。然觀殷人之名、卽不用日辰者、亦取於時爲多。自契以下、若昭明、若昌若、若冥、皆含朝莫明晦之意、而王恆之名亦取象於月弦。是以時爲名或號者、乃殷俗也。夏后氏以日爲名者、有孔甲、有履癸、要在王亥及上甲之後矣。

(42) 殷周間之大變革、自其表言之、不過一姓一家之興亡與都邑之移轉。自其裏言之、則舊制度廢而新制度興、舊文化廢而新文化興。又自其表言之、則古聖人之所以取天下及所以守之者、若無以異於後世之帝王。而自其裏言之、則其制度文物與其立制之本意、乃出於萬世治安之大計、其心術與規摹、迥非後世帝王所夢見也。

(43) 欲觀周之所以定天下、必自其制度始矣。周人制度之大異於商者、一曰立子立嫡之制。由是而生宗法及喪服之制、并由是而有封建子弟之制、君天子臣諸侯之制。二曰廟數之制。三曰同姓不婚之制。此數者、皆周之所以綱紀天下、其旨則在納上下於道德、而合天子諸侯卿大夫士庶民以成一道德之團體。周公制作之本意、實在於此。

(44) 注(40)五五頁。

(45) 『書信』二〇八、二一〇、二一三頁。

(46) 政治上之理想、殆未有尙於此者。文凡十九頁、此文於考據之中、厲經世之意、可幾亭林先生。惟文字未能修飾盡善耳。

『書信』(二二四頁)

(47) 連日翻檢前四史、覺各經立博士事頗有可研究、前人所說往往未了了。又細讀『魏志高貴鄉公紀』、知魏時馬、鄭『古文尚書』已立博士、又魏所立諸經殆全用後漢末諸家、與漢世絕不同、則魏石經所刊『尚書』或即用馬、鄭本、此又與魏石經有關係者也。『書信』(一〇三頁)

(48) 學術變遷之在上者、莫劇於三國之際。而自來無能實言之者。此可異也。

(49) 自漢以後、學術之盛、莫過於近三百年。此三百年中、經學史學皆足以陵駕前代。然其尤卓絕者、則曰小學。

(50) 嘗攷尺度之制、由短而長、殆爲定例。其增率之速、莫劇於西晉後魏之間。

(51) 宋代之學術、方面最多、進步亦最著。其在哲學、始則有劉敞、歐陽修等、脫漢唐舊注之桎梏、以新意說經、後乃有周敦頤、程顥、程頤、張載、邵雍、朱熹諸大家、蔚爲有宋一代之哲學。其在科學、則有沈括、李誠等、於歷數物理工藝、均有發明。在史學、則有司馬光、洪邁、袁樞等、各有龐大之著述。繪畫則董源以降、始變唐人畫工之畫、而爲士大夫之畫。在詩歌、則兼尙技術之美、與唐人尙自然之美者、蹊徑迥殊。考證之學、亦至宋而大盛。故天水一朝人智之活動與文化之多方面、

躍動する精神(續)(井波)

前之漢唐、後之元明、皆所不逮也。近世學術、多發端於宋人。如金石學、亦宋人所創學術之一。宋人治此學、其於蒐集著錄考訂應用各面、無不用力、不百年間、遂成一種之學問。

(52) 汲冢竹書紀年佚於兩宋之際。今本二卷、乃後人蒐輯。復雜采史記、通鑑、外紀、路史諸書成之、非汲冢原書。然以世無別本故、三百年來、學人治之甚勤、而臨海洪氏頤煊、棲霞郝氏懿行、閩縣林氏春溥三校本、尤爲雅馴。最後嘉定朱氏石曾復專輯古書所引紀年、爲汲冢紀年存真二卷。顧其書傳世頗希。余前在上虞羅氏大雲書庫、假讀之、獨掣然有當於心。丁巳二月、余既作殷先公先生王考畢、思治此書、乃取今本紀年、一一條其出處、注於書眉。既又假得朱氏輯本、病其尙未詳備、又所出諸書異同、亦未盡列、至其去取、亦不能無得失、乃取朱書爲本、而以余所校注者補正之、凡增刪改正若干事。至於余讀此書有所考證、當別爲札記、將繼是而寫定焉。

(53) 方詩銘「關於王國維的『竹書紀年』兩書」(『論集』第二輯二八一頁)

(54) 正月、先生被召至日使館、面奉諭旨命就清華學校研究院之聘(中略)。

是歲春日、始擬治西北地理及元史學。四月、從『通典』內抄出杜環『經行記』、而以『太平寰宇記』所引者校之。又從『五代史』抄出高居誨『使于闐記』。從『宋史外國傳』抄出王延德『使高昌記』、並以王明清『揮麈前錄』所引校之。又從『吳船錄』抄出繼業『三藏行記』。從『庶齋老學叢談』抄

出耶律文正『西游錄』。從陶九成『游志續編』抄出劉祁『北使記』。又從明刊『秋澗大全文集』卷九十四『玉堂嘉話』中，抄出劉祁『西使記』，並以四庫本校之。共得古行記七種，裝爲一冊，以備參閱。（注⑥一二八頁）

65 先生著作，不過占其中之一小部分。然先生治學標準；求精確不求廣闊；求專門不求闕通；寧失之偏狹，不寧失之宏大；寧失之瑣屑，不寧失之籠統。故其魄力，雖遠不如何顯船、魏默深、李仲約、柯鳳蓀之功大而烈偉；而其專門精確之處，則頗各有短長，亦有非諸家所可及者在焉。（注⑦一九五頁）

66 『論集』第一輯所收。

67 今年夏間爲『長春真人西游記』作注，又作「耶律文正年譜」，均未定稿。元史素未留意，乃作小學生一次，亦有味也。（『書信』四一九頁）

68 公前所印『黑韃事略』如有存者否，乞賜一本。（中略）李文誠『元祕史注』紕謬甚多，與其所著他書無異，培老乃盛稱其人，殊不可解也。（『書信』四二五頁）

69 近日將敝撰「皇元聖武親征錄校注」二卷，「長春真人西游記注」二卷，「蒙韃備錄」，「黑韃事略箋證」各一卷，並「韃靼考」，「遼金時蒙古考」諸種，共爲小叢書，付諸排印。（『書信』四三〇頁）

60 耶律文正『西游錄』竟發見足本，眞所謂驚人祕籍，聞之喜躍三百。（『書信』四三三頁）

61 『西游錄』頁數想不多，能乞人傳鈔一本否。（『書信』四三

六頁）

62 『西游錄』足本已在印刷中，聞之至爲快慰。弟所撰「親征錄校注」甚爲草率，但志在介紹一『說郛』本耳，故不獨不知有那珂博士校注本，即知服齋本亦未得見。（『書信』四四二頁）

63 『蒙韃備錄』與『黑韃事略』兩箋，近來增補甚多，「遼金時蒙古考」亦須改作，亦深悔當時出版之早。然非有此藍本，亦未必努力改定也。（『書信』四五〇頁）

64 近研究蒙古初期史料，乃知南宋人偽造許多書籍，如『征蒙記』等皆宋人所造也。（『書信』四五二頁）

65 近作「元朝祕史之主因種考」一篇，因『祕史』所記主因種，其實全與金末之乂軍相合，故疑主因即乂軍之對音。考中但提出二者相合之事實，而對乂之音義之鄙見，則別見於致藤田博士書中。因博士曾代『史學雜誌』索拙文，因書此稿寄之，借箭內，羽田諸公所考未能盡見也。（『書信』四五二頁）

66 幸而此書之祖彌之祕史與其兄弟之拉施特書，其子姓之元史及當時文獻，尚可參驗。因復取以比勘，存其異同，并略疏其事實，爲校注一卷。

67 余頃考韃靼事，知遼金二史中有待發之覆。因彙舉蒙古上世事實，疏通照明之。庶足爲讀史者之一助乎。

68 在上述一九二五年四月下旬至一九二七年五月這兩年一個月間，王國維不僅做出了上述蒙元史、西北地理方面的大量研究工作，而且還用不少時間爲學生講授「古史新證」『尚書』『說



文』『儀禮』等多種課程、給清華學校暑期學校、北京歷史社會學會、燕京大學作各種學術報告、并撰寫成「克鼎銘考釋」（一九二六年春）、「孟鼎銘考釋」（一九二六年春）、「最近三十年中中國新發見之學問」（一九二五年八月）、「記現存歷代尺度十七種」（一九二六年七月八月）、「鄂侯方鼎跋」（一九二五年十一月十二月）、「新莽嘉量跋」（一九二六年九月十月）、「六朝人韻書分部說」（一九二六年秋）、「宋代之金石學」（一九二六年十一月）、「蜀石經殘拓本跋」（一九二六年十一月）、「校本水經注箋跋」（一九二七年三月）、「尚書核詁序」（一九二七年五月）、「古史新證」講義等蒙元史、西北地理以外的其他學術研究領域的許多論著、其中有不少爲重要學術論著。（注69二六六頁）

躍動する精神（續）（井波）

69 中國境內古今所居外族甚多。古代匈奴、鮮卑、突厥、回紇、契丹、西夏諸國、均立國於中國北陲、其遺物頗有存者。然世罕知之。

70 現在大學是否有滿蒙藏文講座？此在我國所不可不設者。其次則東方古國文字學並關緊要。『書信』三三六頁

71 『ヴァルター・ペンヤミン著作集』第十卷（晶文社 一九七九年）二二頁。

72 「王國維の學風を論ず——經史子集の革命的轉換」『『東方學報』第六十一冊所收）

「躍動する精神——王國維の文學理論について」『中國文學報』第四十二冊所收）